

問題 10. 大腸癌肺転移

症例：47歳、男性。胸部エックス線異常陰影。

検体（採取法）：手術時肺腫瘍捺印

染色：パパニコロウ染色

問題：正しいものに○、間違っているものに×をください。（VS：バーチャルスライド）

1. VSでは、立方状異型細胞がみられる。 ×
2. VSでは、壊死が目立つ。 ○
3. Cytokeratin 20が高率に陽性となる。 ○
4. TTF-1が高率に陽性となる。 ×

解説

転移性肺腫瘍では、大腸癌と腎癌（淡明細胞型腎細胞癌）の肺転移において特徴的な細胞像を示すことが知られており、細胞像から原発巣の推定が可能な場合が多い。本例のような大腸癌肺転移症例では、背景には、壊死背景というより壊死組織そのものが存在することが多い。これらの背景中に、高円柱状細胞が、孤在性あるいは柵状配列・腺管構造を示す結合性の強い集塊を形成し出現する（図1）。集塊は気管支上皮に類似した直線状の辺縁をしばしば示す。腫瘍細胞の細胞質はライトグリーン淡染で、細胞境界は明瞭である。核は比較的大型で、楕円形あるいは長円形を呈し、核形不整を認め、クロマチンは細顆粒状を呈する（図2）。核小体は大型で1-2個認められる（図2）。免疫細胞化学では、cytokeratin 20・CDX2陽性、cytokeratin 7・TTF-1・napsinA陰性を示す。これらは、大部分の肺腺癌とは逆の染色態度であり、その鑑別には極めて有用である。なお捺印に用いた肺病変は、典型的な大腸癌肺転移の病理組織像を示していた（図3）。

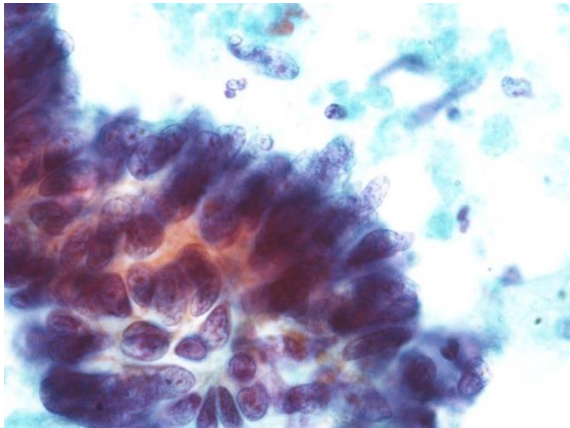


図 1

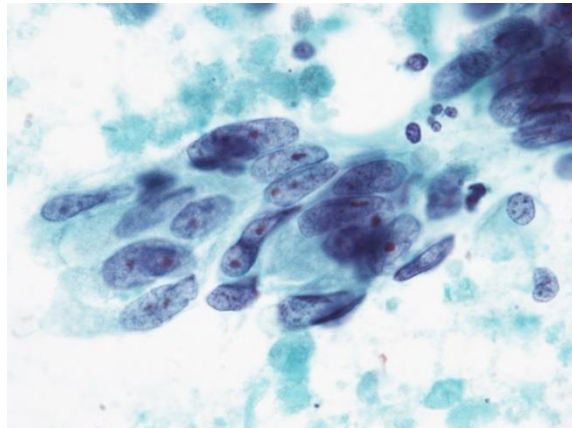


図 2

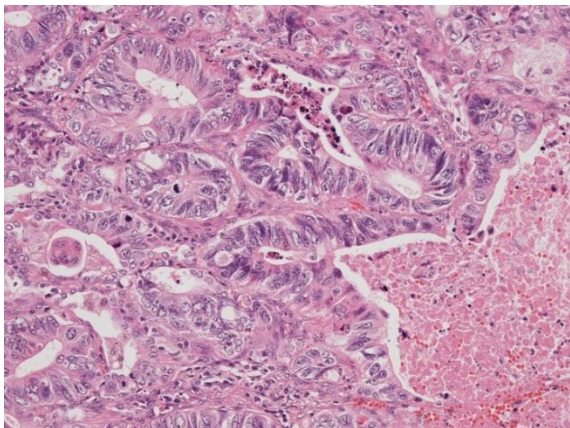


図 3